

講義名	研究演習 (商)		
講義コード	15206	授業形態	開講期・曜日・時限 後期 月曜日 5時限
担当教員	小笠原 宏	演習・演習コード	SEM250
学部・学科	演習分野		
商学科	小笠原 宏ゼミ		
概要説明			
<p>経済経営にかかわらず、文化に関する他関連派生分野の多岐にわたる教養など、深めることも目指している。あらゆる方面で現実と直面する様々な課題や問題にどう具体的に対応するかを実践例を含めて考察し、実践することを積極的に行う。「継続事業体とは」「金儲けとは」「経営戦略とは」といったポイントを、ビデオ(映画他)、新聞雑誌記事などの現実事例を、教材として全員で議論を行い、適格的定量的な理解や考察で終わらない重要なポイントを見つけ理解することを目指す。特にみずからの具体的キャリアプランの構築を、目標立っているための実践的行動の開始を目指す。何が必要か、今の自分に何が不足しているのかを自己分析することから始める。</p>			
主な卒業論文のタイトル			
<p>ネットワークビジネスの研究 中国自動車産業の考察 POSの意義と将来性 サッカービジネスの将来性考察 企業評価手法の研究 職業としてのキャンブラー 中小企業の資金繰りとIPOの考察 など 等多様多彩。経済経営ファイナンス分野に限定しない。 (教員から指定したり制限したりすることは基本的にない。)</p>			
教員よりの要望			
<p>学指針に則して、基本的に対面で授業を行う予定。(ただし並行してzoomを必要に応じて使用) ネット活用して、オンラインでの討議参加なども支障なく行える環境を構築して活用してほしい。使用する映像課題、書籍資料などは、PDF形式などで基本的にネットを通して配布する。パソコン、ネットなど基本的に使い方を慣れていることが望ましい。受講者の各能力の向上をチェックする機会も、もつたいと考える。その他は、講義開始に協議していきたい。ズーム(会議ソフト)を補助的に使用する予定。ネット回線の利用環境を確保(公衆回線ではなく)、マイクなど使ってきちんと発言できる環境を備えて受講することを推奨。これを機会に、ネット社会の活用が円滑にできるようになるくらいの意気込みを持って欲しい。</p>			
選考方法			
<p>基本的に面接をして希望や方向性を聞きたい(安直な選択と、途中放棄を防止したいため。) ゼミとは何か、何のためにあるのかの理解、認識がこちらと学生の間で基本的齟齬がある場合が見受けられるのでその当たり面接で相談にのる。演習 - 卒研まで完遂する義務はない。興味や目的の改定、変更は当然起こりえるから、他ゼミへの転籍、逆に転入も積極的に受け入れている。</p>			

評価方法	
<p>自らのキャリアプランの具体的な構築を行い、その実現のために必要な方策やアドバイスをともに考える。個人の行動計画および達成度、進捗度を適宜してもらい、その無いように応じて評価の加減ポイントとする。それとは並行して、を各自の希望に沿った参考文献などを提示をする。課題予習と討議参加、必要回数のごレポート提出、それを元にした個別面接指導などが基本的な運用方法。個別コースに応じた指導を面談他を通じて行っていくことになる。全体で取り上げるトピックなども意見を聞きながら取り入れる予定。</p>	
教員英字氏名	研究室
Hiroshi Ogasawara	3411
最終学歴	
慶應義塾大学大学院経済学研究科後期博士課程単位取得満期退学	
学位	
経営学修士(MBA)	
主な研究活動・社会活動・研究業績	
大学人物略歴欄他参照のこと。	
趣味・特技	
クレー射撃 ゴルフ テニス 映画鑑賞 旅行 模型製作 他多岐。	
所属	
流通科学大学商学部	
所属学会	
金融学会 日本ファイナンス学会 経営財務研究会 証券経済学会 行動経済学会	
専門分野	
経営財務 経営戦略 投資戦略 金融論 実験経済学 行動経済学	
担当科目	
生活金融論 ビジネス・ゲーム 財務戦略論 ゲーミング演習(院修) 研究演習 、 卒業研究 ファイナンシャルプランニング 投資戦略論	
備考	
<p>本ゼミは、2年後期からの履修可。3年生以降にしばらくはかけるつもりはないので、経営財務など、ファイナンス分野、事業経営の専門的な内容の勉強は3年生(研究演習)で行う。3年生時(本演習単位取得後)には他のゼミへの転籍希望があれば最優先でバックアップ(受入側教員との折衝は自分で行うこと。サポートはする。卒業単位の獲得と所定の年限での卒業と就職先決定を最大の目的とがんばること。転ゼミしても、所属歴有学生として、必要に応じて支援、相談には継続してのっていきますので安心のこと。(本演習)は、必修ではないので、怠慢者は単位認定出来ない。余計な救済措置もしない。)</p>	
実務経験の有無及び活用	
外国銀行及びシンクタンク勤務経験があり、実業界、実務社会での要請や必要要件の理解認識を持っている。ほんとうの「実学」教育訓練の実践を目指している。	